

延方普門院の船越地蔵と忍性

細 川 涼 一

はじめに

鹿島神宮の海（湖）の玄関である大船津の対岸、大船津とは北浦の狭い水路を挟んだ茨城県行方郡潮来町延方に、北浦に東面して真言宗普門院（龍雲山普渡寺）がある。この普門院に、鎌倉時代の律宗の僧、良観房忍性（のち鎌倉極楽寺開山）が北浦の航海安全を祈り、鹿島社の神木の南枝をもって鰐魚退散のために彫刻したという伝承を持つ船越地蔵が祀られていることは、すでに網野善彦氏¹⁾や堤禎子氏²⁾らによって言及されている。

ところで、この両氏はこの普門院の船越地蔵の伝承を、『大日本寺院総覧』の記述³⁾によって紹介している。しかし、私はその出典ともいえる普門院蔵の『常州洲崎普渡寺地蔵菩薩由来縁起』（板本。江戸時代の元禄年中〈1688～1704〉以降の成立）を中心とする普門院の寺宝（史料）を、普門院住職渡邊啓雅氏・同副住職渡邊英雅氏のご協力によって1989年9月に、阿部泰郎氏・小島裕子氏らとともに調査する機会を得た。その概要は、1990年に『茨城県史料付録』24号に短文の論稿を掲載して紹介し⁴⁾、また、われわれの調査ももとにして、普門院でも1991年に『船越地蔵尊真言普門院』というパンフレットを刊行した⁵⁾。

その後、私の『茨城県史料付録』の記述を引用して下さった堤禎子氏の研究も出⁶⁾、また、この記述を読んだ方の『常州洲崎普渡寺地蔵菩薩由来縁起』に関する問い合わせも1、2受けた。

実は、この際の調査は調査者の内部資料として『普門院第一回調査報告』という稿本⁷⁾にまとめているのだが、その後の調査者の多忙などの理由のため、広く活字で紹介することはないままに今日まで過ぎた。しかし、前述のように、私の『茨城県史料付録』における紹介記事が多少は注目されたことでもあり、その史料を直接翻刻して紹介することの責務も感じ続けてはいたので、ここに前稿と重なる部分もあるが、普門院の船越地蔵に関わる忍性伝説について述べるとともに、その史料である『常州洲崎普渡寺地蔵菩薩由来縁起』を紹介したい。

それとともに、普門院所蔵の史料のうち、境内の板碑2基⁸⁾と、船越地蔵を安置する地蔵堂の内陣の柱に朱で書かれた貞享元年（1684）8月24日の地蔵講の交名の銘文も紹介したい。とくに、このうち地蔵堂内陣柱の地蔵講の朱銘は、寺伝では潮来遊廓の遊女の交名だと伝えており、近世女性史の重要な史料でもある。

1 普門院船越地蔵と忍性

忍性ら西大寺流律宗が水上交通の要衝と深い関わりを持ちつつその教線を展開していったことは、今日では網野善彦氏などの研究によって、すでに周知の事実であるといえよう⁹⁾。ただし、この西大寺流律宗と水上交通の関わりは、史料の残存関係もあって、主に瀬戸内海など西国を中心とする指摘であった。

しかし、応安7年(1374)に作成されたと考えられる「海夫注文」(「香取大欄宜家文書」)¹⁰⁾にも「信方津」とその名が見える今日の北浦の水上交通の要衝の延方津に、江戸時代の文献とはいえ、『常州洲崎普渡寺地蔵菩薩由来縁起』によって忍性の足跡が確かめられることは、常陸における律宗の教線の展開と水上交通の関係を具体的に示す重要な事実といえるであろう。

さて、『常州洲崎普渡寺地蔵菩薩由来縁起』(以下、『縁起』と略す)によると、普渡寺(普門院)に安置する地蔵菩薩像の由来は、次のようなものであった。

すなわち、昔忍性が鹿島社に詣で、七日の間衆生済度を物語ったところ、鹿島社の神木の南枝をもって六道能化の地蔵を刻み、永く洲崎(延方の別名。北浦に突き出した延方津の洲)普渡寺に安置したならば、天下太平・国土安穩となるであろうとの鹿島社の神託が下った。そこで、忍性は仰せの如く、南に指した枝を刈って地蔵尊三体を彫刻し、このうち一刀三札の像は鹿島社の告げに任せ、普渡寺に安置したという。

忍性の基本的伝記史料である『性公大徳譜』¹¹⁾によると、忍性が西大寺流律宗を関東に弘めるべく大和国から常陸国に下向したのは、建長4年(1252)、忍性36歳の時のことであるが、この折彼は9月15日に鹿島社に詣で、3日の間参籠して法華経を献じている。また、鹿島護国院所蔵の『鹿島山金蓮院神宮寺』によると、この鹿島に詣でた際、忍性は御手洗寺とも号した清凉院に住して自ら十一面観音像を彫刻して神宮寺に安置しており、鹿島社と忍性の関わりは他の史料からもうかがうことができるのである¹²⁾。

ちなみに、鹿島郡大洋村大蔵の福泉寺(臨済宗)には鎌倉時代末期の清凉寺式釈迦如来像があるが¹³⁾、この清凉寺式釈迦如来像は、多く西大寺流律宗の寺院に安置されたものであることを考えるなら、この福泉寺蔵の釈迦如来像も、もとは清凉院の院号を持つ御手洗寺の本尊として造立された可能性が高い、と私は考える。

無住の『雑談集』¹⁴⁾巻第九「冥衆ノ仏法ヲ崇事」に「常州ノ鹿島ノ社ノ近辺ニ律僧寺ノアリシ比、僧十人バカリ栖」と見える、鹿島社の近辺の「律僧寺」もこの御手洗寺のことと考えてよいであろう。

なお、『鹿島山金蓮院神宮寺』によると、建長7年(1255)には忍性の訴願によって將軍尊親王の令旨が下り、笠間時朝が奉行となって鹿島社と神宮寺の修復も行われている。もとより、この時点での忍性は、筑波山麓の三村寺を拠点としてまだ鎌倉進出の機会をうかがっていた時期であり¹⁵⁾、彼がこの段階で幕府を動かすほどの影響力を行使できたとはとうてい考えられないから、この縁起の伝えることをそのまま事実とすることはできない。しかし、このことは少なくとも忍性と鹿島社の間に密接な関係があったことを示す伝承とすることはできるであろう。

さて、『性公大徳譜』によれば、詳細は不明ながら、忍性には建長8年(1256)に鹿島神の神託が下って靈異を示している。『縁起』に「昔」とのみ記す、忍性が鹿島神の神託によって船越地蔵を刻んで普渡寺に安置したのは、この建長8年のことであろうか。忍性がこのような地蔵信仰を宣伝したことは、彼が『三国因縁地蔵菩薩靈驗記』の巻四以下の続編を増補していることにもうかがえる¹⁶⁾。

さて、この忍性自刻の地蔵が船越地蔵として尊ばれたのは、『縁起』によれば次のような靈驗があったことによる。この入海の普門院前の狭い水路は、瀬が早く常に渦巻が巻く荒川であったが、洪水などで太平洋の海が逆流するため、いつしか鰐が住んで渡船を覆し、人民を取り喰う被害が絶えなかったという(この縁起によるものであろう、北浦と外浪逆浦を繋ぐこの狭い水路は鰐川<鰐川浦>¹⁷⁾と呼ばれている)。

そこで、近隣の人々は、鹿島社に詣でてこの難を免れることを祈った。するとある夜、神職の夢に、一人の僧が来たなら、速やかにこの災いを逃れることができるであろうと鹿島神が告げる。果たして、翌日一人の異僧が来て川辺に佇み、里人を招くと、自分は鰐の難を除くために来た、と述べ、水上に向い読経を始めた。

すると、水面ににわか逆巻が立って風を起し、丈余の鰐の群れが出たかと思うと、回りながら太平洋の海上まで流れ去ったという。

人々は靈夢のとおりになったことに感謝して、この僧の後を付けたところ、普門院の地蔵堂の中に入ると見えて忽然とその姿が消えた。そこで人々は、これが地蔵尊の仏力であることを知って、随喜の涙を流し、昼夜の参詣が引きも切らなくなった。これより渡船の煩いもなく、五穀ますます成就し、人々は忍性作の地蔵を船越地蔵として尊んだという。

この『縁起』で注目すべきは、忍性作とされる普門院の船越地蔵が、水上交通の安全を妨げる鰐を退散させる水上交通の安全を祈念する靈像として信仰を集めていることである。ここにいう鰐は、鮫を鰐という事例があるので鮫のことと思われるが¹⁸⁾、それとともに、延方津前の狭い水路が『縁起』も述べるように、瀬が早く渦巻が巻いて船の航行を困難にさせた自然現象であったことを、鰐の難に仮託して表現したものであろう。このような、渦巻の自然現象が生き物に仮託されたことは、若尾五雄氏によれば、河童が渦巻の擬人化されたものであることにもうかがえる¹⁹⁾。

なお、鹿島社の海の玄関である大船津にも、忍性が建長年中に港の泥濘を固めて修築するため、鶏と竈の額を埋めて道路を作ったという伝承がある²⁰⁾。このように、鹿島社門前の大船津とその対岸の延方津という、鹿島社参詣のための渡河点の兩岸の津(現在はその兩岸を神宮橋が結ぶ)を律宗の忍性が抑えていたことは興味深い事実である²¹⁾。

さて、地蔵は道祖神(塞の神)の本地として多く村の境や人通りの多い交通路に祀られており²²⁾、普門院の船越地蔵が水上交通の安全を祈念する靈像とされたのもその一環のことと考えられる。

この船越地蔵は現在、表面がほぼ全面、尊容も見分けがたいほどに朽損しているが、筆者の調査と同時に行われた武者小路穰氏の仏像調査によれば、櫓材の一本造りで、東国に10~12世紀にかけて行われたナタ彫り(荒彫り)の技法を示しているという²³⁾。その技法が『縁起』の伝える忍性の時代よりさらに遡ると考えられることは、今後の検討課題といえよう。ともあれ、この船越地蔵は古代末~中世初期の東国における仏像彫刻の貴重な作例であるので、その朽損している現状からも、

何らかの保存策が望まれるのである。

2 船越地蔵の靈驗譚

『縁起』は諸国に疫癘が流行した際にも、船越地蔵の靈驗によって延方村には悪病の難がなかったとしたうえで、産前産後の女人がこの仏に詣でて安産を祈ると難産がなく、また、小児は疱瘡麻疹の病が軽いなどの靈驗があると述べている。

このことを裏付けるように、普門院には女性の安産を祈願する「船越地蔵尊、安産御守護、普門院」「船越地蔵尊、取子御守護、普門院」「二子除龍雲山、御守護、普渡寺」などの守護札板木が残されている。安産の願かけのために普門院に参詣する近世の女性に、これらの板木で刷られた守護札が配られ、幽冥界に落ち込みやすい子供を救う、船越地蔵の子安地蔵的な靈驗が喧伝されたものであろう。地蔵菩薩が江戸時代、流行仏の代表として人気があったことは宮田登氏の指摘があるが²⁴⁾このようにして、普門院の船越地蔵は、この地域の近世の流行神仏として、民間の信仰を集めたのであった。

『縁起』は、船越地蔵のこのような流行神仏としての奇蹟を喧伝するために、次のようないくつかの靈驗譚を付け加えている。

元禄年中（1688～1704）のこと、西山公が、船越地蔵の靈驗の著しいのを疑ってこの像を川に浮べ、まこと誓いに洩れない仏ならば、川上に登れと言った。すると、地蔵は、漫々たる水の上をいささかも川下に流れることなく、川上に登ったので、彼は疑心を抱いたことを恥じ、この地蔵を礼拝して地蔵堂の修復をしたという。

その後、土浦の清水某がこの川を渡った時、にわかに起こった暴風によって、箱に収めた重代の名刀を船中から水底に落としてしまった。彼は、常日頃信じていた船越地蔵に祈ったところ、暴風は納まり、やって来た数艘の漁船が網で名刀の箱を引き上げ、名刀は彼の手に戻った。

また、下総十六洲の高安氏と号する老医は、船越地蔵を信じ、地蔵に念じて薬の調合をしたが、速やかに病を治すので、名医として名が高かった。彼は82歳で没したが、初七日に船越地蔵が僧となってその霊前に回向し、高安は自分を信じたので、現世には息災延命、終しては安樂土に往生した、と親族に告げた。

その後、近村の里人たちが、地蔵堂前の敷石を建立しようとした際、堂前にある松の木が敷石の妨げとなった。ところが、その松が一夜のうちに10間ばかり移動した。

また、碧巖へきがんせんしき識信士という隠士が船越地蔵を信じて、自分は往生の際に仏舎利の身となるという願を立てた。彼はその心願どおり、往生の際に遺骨が19の舎利となったという。

このように、『縁起』は船越地蔵の奇蹟をめぐる近世の靈驗譚をいくつか付け加え、その流行神仏としての喧伝を計っているのである。そこに示された現世利益信仰は多岐の面にわたるが、中でも、水上交通の安全に関わる奇蹟が多いことが、船越地蔵が安産祈願や子供の治病の流行仏として女性の信仰を集めた側面とともに注目されるのである。

3 地蔵堂柱の地蔵講交名と潮来遊女

この船越地蔵を安置する普門院地蔵堂は、江戸時代初期の建築であり、その内陣の柱の一本には、「地蔵講板久和田町／貞享元年／子八月廿四日」として、妙誠・広閑・妙心3人の法名、おかめ・お作・お子・おるす・おまつら78人の俗名の女性の名が朱書されている。寺伝では、この地蔵講の女性たちの名は潮来遊廓の遊女の名と伝えている。これらの俗名の女性名が潮来遊廓の遊女のものとするならば、もとよりそれは源氏名（遊女名）ではなく、本名である。

潮来遊女の成立については、小林雅子氏の研究で寛文期（1661～72）以降と考えられているが²⁵⁾、その遊廓の水戸藩による公認は貞享元年（1684）ともいわれている²⁶⁾。とするならば、この柱の地蔵講の朱書はまさに潮来遊廓が公認された年のものということになる。ちなみに、公認当初の潮来遊廓の遊女数は、小林氏の研究によれば、平均して120人ほどであった。

この柱の朱書が潮来遊廓の遊女のものであるならば、この地蔵堂それ自体が、遊女らの寄進によって造られたことを示す、近世女性史の重要な史料とすることができるのである。

おわりに

普門院船越地蔵の彫刻や大船津の修築など、北浦の水上交通の安全と関わる形で延方津・大船津に伝承を残す忍性は、高塚菰村氏の採訪するところによると、延方村の親村といわれる古高村（潮来町延方。中世の「ふなかたの津」か）²⁷⁾の国上神社に伝わる簞舞の獅子の作者（建長の頃忍性が作る）でもあるという²⁸⁾。

このように、常陸国の津々に忍性に関する伝承が伝わっているのは、興味深い事実なのである。

- 1) 網野善彦「地名と中世史研究」（『中世再考』日本エディタースクール出版部、1986年）。『茨城県史』中世編、茨城県、1986年、139頁（網野善彦氏執筆分）。
- 2) 堤禎子「無住と常陸「北ノ郡」」（『日本仏教史学』17号、1981年）。
- 3) 堀由蔵編『大日本寺院総覧』上巻、名著刊行会、1974年復刻、1103頁（「普門院」の項）。
- 4) 拙稿「延方普門院の船越地蔵と忍性」（『茨城県史料付録』24号〈『茨城県史料』中世編Ⅲ、付録〉、茨城県立歴史館、1990年）。その内容は、本稿に吸収した。
- 5) 渡邊啓雅ほか『船越地蔵尊真言普門院』普門院護持会、1991年。
- 6) 堤禎子「常陸・北下総における律宗教団の痕跡」（『鎌倉』66号、1991年）。同「中世、地蔵信仰のトポスー常陸・北下総（茨城県）の場合ー」上、下（『月刊百科』355、356号、1992年）。
- 7) 『普門院第一回調査報告ー普門院所蔵板木・普門院境内板碑銘文・地蔵堂内陣柱朱銘文ー』（小島裕子・細川涼一編、調査団内部資料〈稿本〉、1989年）。
- 8) 板碑の種子は、児玉義隆『梵字必携』朱鷺書房、1991年、による。
- 9) 網野善彦『蒙古襲来』（日本の歴史10）、小学館、1974年、289頁以降。三浦圭一「鎌倉時代における開発と勧進」（『中世民衆生活史の研究』思文閣出版、1981年）。

- 10) 『千葉県史料』中世篇香取文書、千葉県、1957年、「旧大槻宜家文書」131号。
- 11) 『川西市史』第4巻史料編Ⅰ、川西市、1976年、「多田神社文書」62号。
- 12) 『鹿島町史』第1巻、茨城県鹿島町、1972年、399頁(堀田富夫氏執筆分)は、忍性が鹿島に来てははじめ御手洗寺に仮寓し、後に鹿島神社の北、須賀社の後にあった安居寺に移って律を弘めたという伝承があることを述べている。
- 13) 『大洋村史』茨城県大洋村、1979年。
- 14) 山田昭全・三木紀人校注『雑談集』三弥井書店(中世の文学)、1978年。
- 15) 三村寺における忍性については、和島芳男「常陸三村寺と忍性」(『金沢文庫研究』195号、1972年)。堤禎子「常陸における無住の師について」(『茨城史林』9号、1980年)。『筑波町史』上巻、茨城県筑波町、1989年、359～371頁(糸賀茂男氏執筆分)、など参照。
- 16) 真鍋広済『地藏菩薩の研究』三密堂書店、1960年、159～160頁。
- 17) 吉田東伍『利根治水論考』崙書房、1974年影印版、243頁。
- 18) 矢野憲一『鯨』法政大学出版局、1979年。
- 19) 若尾五雄『河童の荒魂 河童は渦巻である』堺屋図書、1989年。
- 20) 高塚菰村『潮来と鹿嶋香取』崙書房、1974年影印版、111頁。
- 21) 西大寺流律宗が川の渡河点の兩岸を抑えていたこのような他の事例としては、南山城の木津川の渡しの北詰に上粕泉橋寺、南詰に木津橋柱寺(大智寺)(ともに西大寺末寺)が建っている事例がある。泉橋寺には、鎌倉時代末期に西大寺流律僧の尊道房真円(大和般若寺長老)によって造立された、木津石地藏が木津川に南面して立っていることも、船越地藏と比較して興味深い点である。拙稿「鎌倉仏教の勧進活動」(高木豊編『日本仏教史4 鎌倉時代』雄山閣、1988年)参照。
- 22) 速水侑『地藏信仰』塙新書、1975年。
- 23) ナタ彫り(荒彫り)については、むしゃこうじ・みのる『地方仏』法政大学出版局、1980年、8～15頁参照。
- 24) 宮田登『近世の流行神』評論社、1972年、130～133頁。
- 25) 小林雅子「公娼制の成立と展開」(女性史総合研究会編『日本女性史』第3巻近世、東京大学出版会、1982年)。
- 26) 石川猶興『利根川民権紀行』新人物往来社、1972年、19頁。
- 27) 日本歴史地名大系『茨城県の地名』平凡社、1982年、428～429頁(「古高村」の項)。
- 28) 高塚菰村『潮来と鹿嶋香取』(前掲)、71～72頁。

付 普門院所蔵史料

1 『常州洲崎普渡寺地藏菩薩由来縁起』

常州洲崎普渡寺地藏菩薩由来縁起

抑常州洲崎普渡寺に安置し奉る六道能化地藏菩薩の由来縁起を委く尋奉るに、此御仏は忝も昔忍性菩薩鹿嶋太神宮に詣給ひ、一七日の間衆生済度の御物語有しに、神告て曰、「我神木の南枝を以て六道の能化地藏菩薩の像を彫、永く洲崎普渡寺に安置せば天下泰平国土安穩ならん」と。神勅にまかせ、菩薩其俣南へ指たる枝を伐て地藏尊三昧を彫刻し給ひ、中にも一刀三札の尊像は太神宮の告に任せ、普渡寺に安置し給ふ也。此地は絶景類なくして名所多く、堂前には大河ありて流水湛々として藍のごとく、瀬の早き事恰も射る矢の如し。川末は大海に続き、水底の浅深量りし事なし。常に渦巻立て渺々たる荒川なり。川下は渡船の便あれども大雨の御は洪水して、大海につく川なればいつしか鰐住て渡の船を覆し人民を取喰ふ。故に渡船絶て隣村の通路なく里人の害をなす事久

し。こゝに於て近村ものども鹿嶋太神宮へ詣で此難を免ん事を祈る。或夜神職の夢中に太神宮告てのたまはく、「洲崎の大河に鰐住て渡船を妨、人民を取喰ふ。依て此難を訴る者あるかゆへに安置の仏に約し置たり。近きに必ず禿人の僧来らば速に災をのがるべし」と夢中に神勅を蒙り、直に此旨を里人に語る。はたして翌日禿人の異僧来りて川辺にたゞずみ里人を招ていわく、「我鰐の難を除かん為に来りたり」と水上に向ひ良久しく読経して有ければ、水面俄に逆巻立て風を起し、丈余の鰐頭れ、出狂ひ廻りて海上に流れさりぬ。誠に靈夢疑ひなしと彼僧の跡を求めけるに、地蔵堂の内に入と見て忽然として消給ひぬ。是正しく六道能化地蔵尊の仏力なりと諸人歎喜の涙を流し、昼夜の参詣引きもきらず、是より渡船のうれひなく五穀益成就しぬ。是より忍性菩薩一刀三札の御作船越地蔵と尊び奉る靈像是也。其頃諸国一統疫病流行して近村家毎に煩ひけれども、当一村には悪病の難なく、殊に産前産後の女人此仏に詣で安産を祈るに、禿人として難産なし。一切の悪事災難を遁れ、小兒疱瘡麻疹の病軽く、靈驗日々にあたらなり。又元禄年中の事なりし。西山公此所に入興有て、靈驗の次第を聞き召、能化の仏力さも有べし、然といへ共余りに靈驗の著明を疑情ありて、仏の真偽を試んと尊像を大河の中へ浮べ給ひ「誠に誓に洩給はすは水上に登り給へ」と川中へ流し給へは、不思議や漫々たる水上をいさゝかも水下に流れ給ふ事なく、眼たゞく間に五町余り水上に登給へり。西山公大に感歎ありて、「あゝ有難や勿鉢なや。かゝる奇特の御仏を疑心せし罪免させ給へ」と、堂内に移し給へは、光明赫奕として薫香四方に満たり。西山公奇異の思ひをなして、機嫌輕蔑のこゝろを改、懇懃合掌恭敬礼拝して再建の修覆をぞなし給へりと申伝へたり。其後土浦の在所に清水何某といへる人、所用ありて此川を渡るに、折柄仲秋の中旬にて、晴天俄に雲を発し、忽暴風落し来て船をゆり上ゆり下し、波涛船中に打込、楫取櫓を捨掉を流し、船中の旅具を過半水中に落入りし。中にも重代の名刀一振箱に納有けるを水底に落しり、取べき方便なし。何某深くこれを歎、常々信する地蔵尊を只一心に憑奉るに、一天あざやかに晴渡り、暴風納、船中座するが如く、しかるに海の方より数艘の漁船漕来りて、各網を打込けるに、かゝる名刀の箱を引上、清水何某の手に戻りぬ。これ全く尊像の御庇なりと直に普渡寺に詣るうゑを拝しぬ。爰に又総州十六洲の中に禿人の老医あり。高安氏と号し医術に越高名也。常に此尊像を信じ朝来夕往に御名を唱へ、地蔵経を誦誦し、異病難症の病をば必ず仏に念じ薬調するに速に病を治しぬ。既に命数尽て八十二歳にして没しぬ。然るに七日の暁に至て、禿人の沙門来りてかの靈前に向ひ念比に回向ありて光明あたりを輝し、異香薫じ渡り、微妙の声を発し、「善かなへ。我こそは洲崎普渡寺の地蔵也。高安常々我を信じ、現世に有ては息災延命、今命終しては安樂土へ往生せり」と告て忽消給へり。高安の親族是を拝して、眼のあたりかゝる奇特を見る事よに有難きことなりとて近隣遠村に伝へ、尊像の御恵を感嘆しぬ。其後諸堂大破に及びたれば、修覆の為茅を奉納のこゝろざし有りて、近村隔邑に至まで老若男女茅を苜運持ければ、堂前に漫々たり。かゝる折からなれば、敷石の建立すべしと敷石寄進におよびけるに、堂前に大なる松木ありて敷石の妨となれり。いかんして此松を引くべきやと里人心を痛けるに、不思議なるかな一夜の中にかの松おのれと地を替て十間ばかり退きけり。今に始め仏力やと諸人猶信心をこゝろして敷石故なく出来しぬ。爰に又碧巖識信士とて、世を遁れ仏道に帰依せし隠士あり。常に尊像を信じ、我往生に至なば仏舍利の身となるべしと願ひたるに、命数尽て往生せり。信士の心願空しからず遺骨十九の舍利となる。識は十九の点くわにて心願成就したる事識心眼目異名とて識大呬字の成仏は諸説おん経明らかに不転肉身得無漏の経意に叶し。舍利の数末世に残りて疑なく、只一心に念ずれば、現世息災延命に來世は極樂安養に生ずる事、惡趣に出現ましへて衆生済度の御利益猶信じても余りあり。かゝる尊き御仏はおはしませとも、その奇瑞を知らざる人まゝ、多し。故に尚信心の輩へ縁起由来を知らしめんとそのあらましを書のぶるもの也。

龍雲山 普門院
普渡寺

○原文では本文の漢字に平がなのルビが振られているが、翻刻にあたっては省略した。

2 普門院境内板碑銘文

①正保4年(1647)10月12日

(天蓋)

 正保四天
 浄阿弥禅定門菩提
 妙要禅尼逆修
 十月十二□

○金剛界・胎藏界大日二仏種子(アーンク・パン)。

○高さ89cm、幅70cm、厚さ6cm。

○黒雲母片岩。

②紀年銘なし


 浄阿弥 参阿弥
 浄心□
 蔵人ホ門□ 住□□

○阿弥陀三尊種子(キリーク・サ・サク)

○高さ67.5cm、幅83cm、厚さ7cm。

○黒雲母片岩。

3 地藏堂内陣柱朱銘

									およめ
	妙誠	おちよ	お与	おき	お丹	およめ	お百	おゆき	か、
貞享元年	広閑	お伝	おまん	おなつ	お子	お留す	おにく	おなつ	お丹
	妙心	お竹	お竹	おあん	おなつ	およめ	おみつ	おみや	およ
地藏講板久和田町	おかめ	おかめ	おあき	およめ	おるす	おき	おこ、	およ	おたツ
	お作	おさち	お竹	おき	お□□	お祢い	おき	おとら	お千
子八月廿四日	お子	おみよ	おあん	おつま	おるす	おたん	おまん	お千	おなつ
	おるす	おた祢	おさゐ	お妙	おいせ	お祢い	おかめ	おうめ	おくに
	おまつ	お□□	おとら	か子	お祢い	おちよ	お子	お子	およめ
			ふき	おつる	おきく	お奈つ	おわ	おなつ	おいね
									お□□

○寺伝では、この朱銘は潮来遊廓の遊女の交名であると伝える。